

らどんどん増えています。それはH I V的に対応するために学校教育がきちんとエイズのみならず肝炎とか非常に深い知識を学生は持っていますが、そういう教育をきちんとやっています。

例えばオーストラリアの経験で言いますと、小学校にはどこから赤ちゃんが生まれるという性の一般のことをかなりきっちり子供さえ知っています。学校と親は強いコミュニケーションを持っていて、学校が親に情報を提供する、親が子供に提供する、学校も子供に提供すると、三者がうまく協調しながらやっています。中学校になりますとセックスそのもの、あるいは性による病気を教えていきます。ここではもっと深く肝炎とか詳しく教えています。そういう流れの中できちんとコンドームの使用が増えていくということを達成しています。そういうものを早く学んで、日本もそういう教育に本腰を入れてほしいと思っています。

今、私ども学校の性教育に注目してしまっていて、いろいろな聞き取り調査をやっていますが、小学校までは小学校なりの素朴な教育をやられています。ところが中学校、高校はほとんどやられていません。授業が減っていく、主要教科のウェイトが高いわけですから、一番先に何を切るかといいますと性教育を切ります。養護の先生の時間を削ってしまいます。ですからむしろ驚いたのは、ほとんど何も教えていないです。一時は文部省も一生懸命やってくれましたが、そういう号令がかかってこないで、教育現場ではほとんど性教育がされていないという驚くような現状になっています。ですからほとんど無に近い状況とさせていただいていいと思いますが、早く教育の中に、すべき時期にする教育を広げてほしいと思います。

小林 先ほど南谷先生のほうから病院というのは受ける側で、なかなか教育とかそうしたもののまでは及ぶことはできないとおっしゃられていましたが、そこで岡先生にお聞きしたいのですが、先生は国際医学者という立場でさまざまな各国のエイズに携わる最前線の学者との交流も深いものを持っていらっしゃると思いますが、各国ではそうした意識がどこまで働いているのか。また欧米とか、開発途上国とかで予防、啓蒙活動について、どの程度まで考えられているのかお聞きしたいのですが。

岡 一般論としてというのは言えないのですが、確かに病院というのは南谷先生がおっしゃられたとおり、なかなか啓蒙のしづらい場所ですが、ただドクターの中でも非常に積極的に啓蒙活動に参加している人たちが海外にいっぱいおられます。彼らはそういう活動をどこでやるかという、病院をいったん離れてN G Oなり何なりを組織して、そういう

ところで実際に、例えばあるソーブランドに入り込んで、そこに来ている人たちがどのぐらいの陽性率になっているのかということを知りたいという方を地道に検査しているような方も知っています。だから病院というのはある意味、実際に来ている患者さんがいると、そこを前面に出すと難しいところがあるので、本来はそういう状況を知った人と、むしろ一般のNGOなりそういう人たちがうまく連携できて、そこに情報が伝わって、そこで活発にできればより有効になるのではないかと思います。

具体的に例えばアメリカがどうだ、フランスがどうだということについては余り詳しくないのですが、やはりアメリカにはかなりたくさんNGOがありますし、オーストラリアはもちろんありますし、台湾にもあります。そういう面で言うと、日本は活動している人たちと病院との距離があり過ぎるのかもしれないという反省はあります。

小林 きょうのパネルディスカッションは時間が迫ってきていますが、大きなテーマとして、エイズは身近なところにまで迫っている脅威である。しかも風俗とか特別なプロセスを経てかかるものではないというのが一つの大きなテーマだと思います。

それにあわせて、若い人の意識をどう変えていくか、若い人のエイズに対する考え方の真剣味をどのように作り出していくかという点に尽きると思います。そこで今若い人の性をどう身近に感じているかというのは、マスメディアの中で雑誌とかアダルトビデオとかという点に入るとは思います。そこで熊本先生にお聞きしたいと思います。先生は各界の性関係者との交流がありますが、研究と兼ね合わせてアダルトビデオに出ている俳優がちゃんとコンドームをつけるシーンを見せれば研究費として5000万プラス出してもいいということも実際にあったと先ほどお聞きしたのですが、その辺を詳しくコンドームとからめながらお話しいただければと思います。

熊本 どうやったら教育できるかという点ですが、神戸の事件で「エイズは性感染症で怖いよ」といったときには、マスメディアが相当流してくれたわけです。それで性感染症はグッと下がったわけです。それをすぐやめてしまったために、また上がってきて、先ほどご質問があったように、92年ぐらいずっと上がってきたのが、東京周辺で「東南アジアの人たちがエイズを散らばしているよ」と。それでまたあわててコンドームをつけたので性感染症はまた下がってきました。ところが薬害エイズでほかに注意がいったために、また性感染症が上がってきています。

みんなが心配するかしらないか、心配させるための情報をちゃんと流しているかということにかかっています。そのためにきょうは公開講座でメディアの方に来ていただいて、せ

ひ飽きずに繰り返し繰り返し情報を流していただきたい。ただ、今おっしゃるように性教育というのは学校の現場ではほとんど教えていません。高校生に実際に聞くと、テキストブックというのはアダルトビデオみたいのが多いので、全男優がコンドームをきちっと使って、コンドームを使うことが大事だということを教えれば、みんなも使うのではないかという話があるわけで、そのぐらい手を替え品を替え、粘膜接触、オーラルセックスで性感染症がうつるなんて医者は常識でも一般の人はそういう認識は全然ないし、セックスワーカーの人たちもほとんど知らないです。そういう一番影響のある部分でコンドームを粘膜接触の最初から最後まできちんと正しくつけるという教育が必要です。

性交渉でどれだけうつるかということ、淋菌とクラミジアは1回の接触で大体3分の1うつります。一晩に2、3回接触すると3分の2はうつると言われています。かなりうつります。そういうことを考えると、とにかくコンドームをきちっと使うということ以外方法がないわけです。WHOのエイズ担当官は自分の子供が中学に行ったけれども、中学でコンドームのことを娘たちが習っているということです。だから学校でも教えなければならぬし、日本の場合は学校でもやってほしいけど、アダルトビデオとか、いろいろな情報誌、新聞、テレビで繰り返し繰り返し流してきた。しかもアメリカのエイズセンターなんか行って、ロサンゼルスでどのぐらいの頻度で流しているかと聞いたのですが、毎週1回は最低情報を流してコンドームの必要性を強調しています。ホモセクシャルの間にコンドームを使わせるのに1年かかったといいます。50何回毎週のように出して初めて効果がある。ですから、よほどしつこくメディアの方たち、あるいは影響ある人たちが意識してコンドーム、コンドーム、コンドームと言ってコンドームを使わせるように教育していただきたい。言っただけでは使わないのだったら、ファッショナブルなコンドームを使うとカッコいいよというような形をつくっていただいて、コンドームを使うことを皆さん、常識化していただかないとダメだと思います。

小林 今渋谷とか原宿にはコンドームの専門店がありまして、一つはファッションになっている部分もあると思います。先ほど木原先生のデータにもありましたように特定のパートナーとはコンドームを使う。ところが不特定のパートナーだと使わないというデータもありました。ある意味でセックスはそこに醍醐味があるというか、見ず知らずの人と乱れるセックスもしたいということも人間にはあるのではないかということを考えさせられました。

そこで会場からいただいた質問の中で「啓蒙・啓発活動はだれがすると最もよいと思

ますか？」というのがありました。これはある意味では一番身近だと思うのは人気タレントが「コンドームを使おう」とPRするのが一番いいとは思われます。ただそのときに所属するタレントの所属事務所が絶対反対するであろうと思うわけです。アメリカのようにマジック・ジョンソンがエイズにかかっていたというのを公表しましたが、日本では著名人がエイズにかかっていたというほど、まだオープンではないと思いますし、まだまだ薬害エイズからかかると思っている方もいると思います。そうしたところをどのように取り除いていくかという点で、いろいろなメディアが考えなければいけないところもあるかと思っています。

そこで先ほど話がありました。アダルトビデオの中で、ごらんになった方で「アレツ」と思った方もいらっしゃると思いますが、ビデオの冒頭で「ストップ・エイズ」ということで、「当社はエイズに対する活動として収益の一部をエイズ撲滅のために寄付しております」というようなことをやっています。

最後に田宮さんにお聞きしたいんですが、エイズに対して撲滅していこう、協力していこうというメーカーがありますが、中を見るとコンドームを使わないセックスでやっているという一つの矛盾があります。これから田宮さんもこうしたお話をメーカーとか、そういったところに話す、提案するというようなものをどのように考えられたか、お聞きしたいと思います。

田宮 まずストレートにぶつけていこうかなと思っています。ただ、相手の職業柄なかなか難しいと思いますが、的を射た答えでなくてすみません。

せっかくですから現状をお話ししますと、最近アダルトビデオ業界はプロレス団体ではありませんが、メジャーレーベルとインディーズレーベルというものに大きく分けられます。メジャーレーベルはビデオ倫論といって、業界の人たちが団体をつくって、余り過激な内容になり過ぎないようにしようと抑制する機関があります。インディーズのビデオ団体はそういったメジャーのレーベルに属さず、そういう審査機関も設けていません。そういった二極化がある中で、小林さんからあったビデオの冒頭にエイズ予防を啓発するテロップを流すけれども、実際の撮影現場ではいかなるものだろうかという話もあります。

僕自身、どれだけのAVメーカーが実際撮影時にそれを使っているかということ把握していませんが、恐らく最近のAV業界の流れを見ますと、AVを見たことがない人はピンとこないかもしれませんが、最近アダルトビデオというのも性格が変わりまして、バブルの絶頂期には単体の女優物のはやっていました。アダルトビデオを借りる男性も、こ

の女性のアダルトビデオが見たいという目的でビデオ屋さんに足を運んでいたのですが、最近アイドル的な存在がいなくなりまして、企画物が優勢です。メーカーさんもスカウトなり募集なりで集めた素人の若い女の子を単発的に企画で使う。それが看護婦さんであったり、キャバクラ嬢であったりOLであったりいろいろなシチュエーションがありますが、そういった時代になって5年以上経ちますが、そうなってくると職業としてやっている女優さんではないですから、そういったものを撮影のときにつけるという意識は非常に低いと思います。そういうところから意識を高めていくことは必要なのではないかと僕もきょうこの会に参加して感じました。

小林 とかく今のマスコミは風俗とか性については、扇情的な若者に対するものはあふれています。セックスの体験談とか風俗的な報道はいろいろ取り上げられたとしても、いざ病気というものについて学術的に考証しようとする拒否する人がまだまだ多いと思います。そこでこうした会合を今後定期的を開いて、またお集まりの皆様にもいろいろご協力いただいて、よりよい方向に持っていきたいと思いますが、最後に熊本先生から今回こうしたものについて、第1回目が終わりました。そこでまず今の所感と展望をお話いただければと思います。

熊本 先ほど申しましたように今回一般の方たちも含めて、殊に力点を置いて情報メディアの方にお集まりいただいて現状の性感染症、エイズを巡る問題を理解していただく、そしてコンドームキャンペーンをちゃんとしないとダメだよということを認識していただいて、皆さんがお持ちの情報ルートで一般の人にコンドームキャンペーンを積極的にしていただきたい、それがきょうの主目的です。そういう情報メディア以外のいろいろな保健関係の方、医学関係の方たちも含めて、いろいろなことを抜きにして「とにかくコンドームを使いましょう」ということ以外ないわけです。

そうすると先ほど小林さんが言われたようにコンドームコンドームというと、殊に若者に煽っているんじゃないかという意見が出ますが、例えばそれに関心を持ったとしても、車に乗るんだったらどうしても免許証だけは取りなさいと同じように、性交渉をするなら絶対免許証を持たなければ人を殺すし自分も死ぬ、と同じようにコンドームをしなければダメだよということを徹底していけば、若者が車に乗っても街が安全になるのと同じように性交渉がどうなろうと、安全に、みんなが性の健康を守ることになりますから、とにかくコンドームというと社会的に抵抗がありますね。テレビで、余りコンドームという言葉を使わないでくださいということと言われるアジテーションがある限りはダメだと

思います。ですから、コンドームに対する精神的抵抗をみんなでなくす。そしてコンドームをみんなでうまい形で使って、車の免許証を持つのと同じような形にする運動の最初のステップとしてきょうの公開セミナーがあったわけですし、これからも我々としては可能な限り東京でも大阪でもいろいろな形でやりたいし、きょうの会場に来ている方々がまた計画していただいて、そういう形でやっていただきたいし、必要があれば、我々のメンバーも協力させていただいて、そういう行動を取りたいと思います。

先ほど島田先生が言われたようにエイズ予防教育をやるのに、どうやったら一番いいかということをおもひで考える。先ほど医者は何しているのだということになってしまったんですが、医者だけではできないことですから、情報、一般市民、教育の方、そういう方も含めてみんなで知恵を絞ってじょうを流していく最善の方法をこういうところで考えて、つくり上げていく必要があると思います。

小林 人間は例外意識を持っていて、自分だけは死なないという意識がありますね。自分はエイズにかかるわけがないと思っている人がまだまだ日本には多いと思いますが、自分ももしかしたらかかる可能性がある、かかっているかもしれないという意識をいかにつくっていくかということと同じだと思います。

きょう会場にこれだけの方がお集まりいただきまして、1カ月ほど前に、この会をどのようにしてやっていくかというときに、果たして一般の方が来られるのだろうかということをお相談していましたが、きょうはこれだけ盛況になりましたし、質問もたくさんいただきました。まだまだ決して大きくない組織ではありますが、これから各先生方、皆さんと力を合わせまして、大きな流れとして動いていきたいと思っています。

きょうは先生方、ありがとうございました。また皆様、最後までご清聴ありがとうございました。また皆様のご協力を得て、このような会を開催していきたいと思っていますので、その節はよろしくご指導、ご鞭撻のほどをよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。(拍手)

(終 了)

Ⅲ．研究成果の刊行に関する一覧表

研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の 編集者名	書 籍 名	出版社名	出版地	出版年	ページ
熊本 悦明	日本性感染症流行の現状（附性感染症の歴史）	熊本 悦明 松田 静治 川名 尚	性感染症／HIV感染－その現状と検査・診断と治療	メデカルビュー社	東京	2001	18-36

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
熊本 悦明	女性優位のSTD時代：STDの最近の動向	臨床婦人科産科	55	10-18	2001

IV. 研究成果の刊行物・別刷

20000559

以降P.119－148は雑誌/図書等に掲載された論文となりますので、
P.115の「研究の成果の刊行に関する一覧表」をご参照ください。

V. エイズ対策研究推進事業
研究成果等普及啓発事業

(様式4)

〔研究成果等普及啓発事業〕
(エイズ対策研究推進研究事業)

結 果 報 告 書

1 二か所の発表会開催者

大阪府

担当研究班長	木原 正博	京都大学大学院医学研究科教授
同	小谷 直道	読売新聞大阪本社取締役編集局長
事業担当幹事	吉島 一彦	読売新聞大阪本社編集局科学部長

東京都

担当研究班長	松田 静治	江東病院顧問・性の健康医学財団副会頭
事業担当幹事	川崎 猛彦	日本性感染症学会事務局長

2 同上発表会開催日時・場所：

大阪府 3月24日(土) 午後2時から4時半まで、
(大阪市北区梅田1・新阪急ビル・パレス大阪スカイルーム)
東京都 3月26日(月) 午後6時から8時半まで
(東京都千代田区九段北4・アルカディア市ヶ谷・私学会館)

3 共通発表テーマ：「若者と性の健康——その現状と対策」(添付の宣伝用チラシなど参照)

4 発表会参加者：大阪府84名・東京都91名

5 発表内容：第1部は、専門医学者の立場から、自覚症状のないSTD/HIV感染など、性の健康を侵害する現状を解明するとともに、日本人の性行動の調査を発表した。この結果をもとに第2部では、パネルディスカッションの形式で、これからの性の健康をどう促進させるかを議論した。

6 発表会の成果：受講者は、開業医、看護婦・保健婦、学校の養護教員のほか、看護学生などが比較的多かった。性感染症とエイズについての最新の知識をより深められたと思われる。それぞれの持ち場において、性の健康について、啓発・啓蒙に努めてくださるものと期待している。なお、読売の記事参照。

公開
シンポジウム

若者と性の健康

3月24日(土) 午後2時～4時30分

入場無料 (受付開始午後1時30分)

新阪急ビル12階ラ・クール スカイルーム (阪神百貨店南隣)

大阪市北区梅田1-12-39 TEL 06-6345-4127

● プログラムコーディネーター 木原 正博 / 小谷 直道

13:30 受付開始

14:00～14:05 開演挨拶 小谷 直道 (読賣新聞大阪本社編集局長)

第1部 性の健康をめぐる現状

司会 吉島 一彦 (読賣新聞大阪本社科学部)

14:05～14:25 性感染症流行の現状について
熊本 悦明 (財)性の健康医学財団会頭

14:25～14:45 エイズ/HIV感染症流行の現状
白阪 琢磨 (国立大阪病院臨床研究部)

14:45～15:05 日本人の性行動の調査から
木原 正博 (京都大学大学院医学研究科国際保健学講座)

15:05～15:25 若者の性生活の実態について
木原 雅子 (長崎大学大学院医学研究科感染分子病態学)

15:25～15:40 コーヒーブレイク

第2部 パネルディスカッション 性の健康をどう促進させるか

15:40～16:30 司会 吉島 一彦

パネリスト 小林 照幸 (作家・大宅壮一ノンフィクション賞受賞)

白井 千香 (神戸市保健所主幹・結核感染症対策係)

熊本 悦明・白阪 琢磨・木原 正博・木原 雅子

主催：財団法人 エイズ予防財団 後援：読賣新聞大阪本社 財団法人 性の健康医学財団

● お問い合わせ

厚生科学研究「STD/HIV予防啓発に関する研究班」事務局 川崎/水野

TEL: 03-3813-4098 FAX: 03-3813-4107 E-mail: std@muj.biglobe.ne.jp

〒113-0033 東京都文京区本郷3-14-10 (財)性の健康医学財団内

参加申込みは、上記FAXまたはE-mailでお願いします。空席があれば当日でも会場でも受け付けます。

20000559

P.154は雑誌に掲載された論文となりますので、下記の資料をご参照ください。

性感染の拡大に危機感.

(焦点 公開シンポジウム「若者と性の健康」)

Japan Medicine. 2001.3



若者と性の健康

3月26日(月) 午後6時～8時30分

入場無料 (受付開始午後5時30分)

アルカディア私学会館 (市ヶ谷駅下車)

千代田区九段北4-2-25 (TEL 03-3261-9921)

●プログラム 司会 松田 静治 (性の健康医学財団副会長) 会場 市ヶ谷駅前 婦人科

17:30 受付開始

18:00～18:05 開演挨拶 南谷 幹夫 (元東京都立駒込病院感染症科 部長)

第1部 性の健康をめぐる現状

- 18:05～18:25 司会 松田 静治
性感染症流行の現状について
熊本 悦明 (財)性の健康医学財団会頭
- 18:25～19:45 性器外 性感染症の問題点
小島 弘敬 (昭赤医療センター泌尿器科)
- 18:45～19:05 エイズ流行の現状と課題
根岸 昌功 (東京都立駒込病院感染症科)
- 19:05～19:25 若者の性行動とSTD/HIV
木原 雅子 (長崎大学大学院医学研究科感染分子病態学)
- 19:30～19:40 コーヒーブレイク

第2部 パネルディスカッション 性の健康をどう促進させるか

- 19:40～20:30 コーディネーター 松田 静治
パネリスト 日高津多子 (都衛生局医療福祉部エイズ対策室係長)
村本 淳子 (三重県立看護大学教授・母性看護)
山梨 文子 (墨田区立吾嬬第二中学校・養護教諭)
熊本 悦明・小島 弘敬・根岸 昌功・木原 雅子

主催：財団法人 エイズ予防財団

後援：社団法人 日本家族計画協会、日本母性衛生学会、日本性感染症学会、社団法人 日本助産協会、
東京STD研究会、東京思春期保健研究会、性と健康を考える女性専門家の会、財団法人 日本性教育協会、
財団法人 性の健康医学財団 ほか

● お問い合わせ

厚生科学研究「STD/HIV予防啓発に関する研究班」事務局 川崎/水野
TEL: 03-3813-4098 FAX: 03-3813-4107 E-mail: std@muj.biglobe.ne.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷3-14-10 (財)性の健康医学財団内
参加申込みは、上記FAXまたはE-mailでお願いします。空席があれば当日でも会場で受け付けます。

がんばれ/サラリーマン

日本人はオーラル好き!!

性病治療法

症状ないが特徴

今週、厚生科学研究「STD/HIV予防のための啓発活動に関する研究班」で、日赤医療センター泌尿器科・小島弘敬部長による興味深い報告がなされた。題して「性器外感染症」。つまり、性感染症は性器に限らず、体のほかの部分にも感染することが有り得るといえるのだ。

性器外感染

結膜、咽頭、直腸などが代表
結膜、咽頭、直腸などが代表。炎症を起こしやすいのだと表例だがその理由に細胞の構造的な感染した場合にまで逆。これと

女性からのピンポンが半数以上 若者の性行動は海外から注目の的

一般的に淋菌、クラミジアなどは目にすぐと激しい炎症を起こしやすいのだという。一方、咽頭に感染した場合にまで逆。これと

しやすさがある。たとえば、感染したことが性器なら、パンツの下に隠されるから他人にわからず済む。ところが、眼帯でもすると「いい年して」、なとどうわさされるかもしれない。その程度ならまだマシだが、母親から新生児に垂直感染を起こした場合は深刻で、「目から鼻へ抜け国民はいないといわれている。14歳ですすでにセックスの経験があるのが3割、19歳までは9割が経験済みという。「4人以上のパートナー」が男子で全体の4割、女子では3割にも上った。ちなみに先進国の中では、エイズが増加傾向にあるのは、今や日本だけといっていい状況にある。「日本の若者の性行動は海外から注目の的になってきている。コンドームを病氣予防に使う人の割合も2割以下です」(木原助手)。

「どうしてこういうことが起きるのかを説明して海外では理解されることがない」と小島部長。ところで、先日公表された内閣府の世論調査によれば、未成年の半数近くがHIVやエイズに関心がないということが明らかになった。長崎大学大学院の木原雅子助手は、このほど、首都圏300の10代カップルの性行動を調査した。12

（倉西隆男）
終わり

夕刊フジ, 2001年 (平成13年) 3月31日

厚生科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）

“性感染症としての HIV 感染” 予防のための市民啓発を、
各種情報メディアを通して具体的に実施実行する研究計画

平成 12 年度研究報告書

発行：平成 13 年 3 月

発行者：主任研究者 熊本 悦明

事務局 〒113-0033 東京都文京区本郷 3-14-10

（財）性の健康医学財団

TEL 03-3813-4098
